



北方民族博物館だより

No.119



AMR2.144 儀礼用具<乳捧げ具> ウリャンハイ モンゴル/バヤンウルギー県
縦47.7cm 横5cm 飾り布60cm 2000～2002年収集

「ツァツァル」と呼ばれる儀礼用の匙さじで、家畜の乳を天地の神々に捧げるために使われる。乳を捧げる儀式そのものも「ツァツァル」と呼ばれる。9つの円が彫られた四角の先端部分で、乳あるいは乳酒をすくい上げてまく。「9」はモンゴルのシャマニズムで重視されている数字で、資料の匙さじは、柄の部分も9つの円が連なったデザインになっている。

目次 Contents

- 1 表紙 儀礼用具<乳捧げ具>
- 2 講習会「チルカット織り」
- 3 講座「北海道土産と木彫り熊」/ウェルカムケース「サハとウシ」
- 4 はくぶつかんクラブ「トンコリを演奏してみよう」
／はくぶつかんクラブ「北方民族の太鼓をつくろう」
- 5 講座「日本とアラスカ先住民の歴史」
- 6 上映会「北方民族博物館 シアター 冬」/訃報「津曲敏郎先生のご逝去について」
- 7 北海道立釧路芸術館「紡ぐ心と暮らし ピーズのはなやぎ・刺繻ししゅうの美～北海道立北方民族博物館コレクション」
- 8 INFORMATION



講習会

チルカット織り

2020.9.26 9:30-16:30

講師：是恒 さくら氏（美術家）

美術家の是恒さくらさんを講師にお招きし、チルカット織りの講習会を開催しました。当初、3月に開催する予定でしたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、延期していたものです。

講師の是恒さんは、アラスカ大学で先住民芸術を学び、チルカット織りはじめバスケットづくりや、トナカイ毛の刺繍ししゅうなど様々な当地の工芸づくりの技術をもっておられます。

チルカット織りは、アラスカに暮らす北西海岸先住民のトリンギットに伝わるもので、世界でもっとも難しい織物のひとつとよばれています。このチルカット織りの技法は主に儀式のときにまとう五角形をした大きなローブに使われました。



常設展示室のチルカットローブ

縦糸にはシロイワヤギの毛とシダラの樹皮をよりあわせたものが使われます。横糸には銅やコケ、樹皮などを使って水色や黄色、黒などに染めた毛を使います。多くの糸を使い厚く織られているため、衣服というよりは、敷物のような印象さえありずっしりとしています。

チルカット織り和其他の織物を比べたとき、カーブを表現できることが特徴になっています。モチーフには高度にデザインされた動物文様がよく用いられています。

講習会では丸がひとつ織り込まれたペンダントづくりを目標にしました。講師手づくりのチルカット織機を使い、シロイワヤギの毛やシダラの樹皮のかわりに太いたこ糸と毛糸を材料にしました。

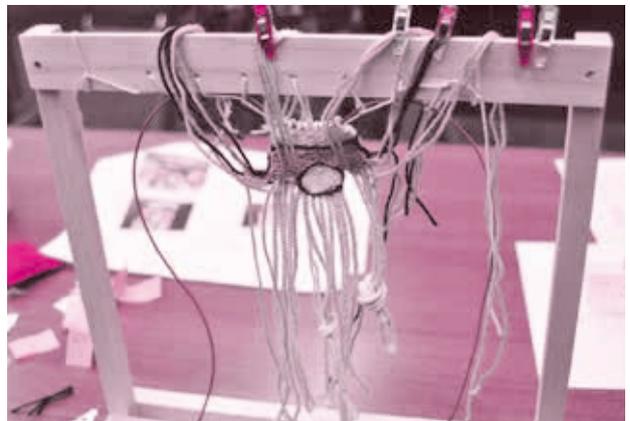


見本を手に指導する講師

上からぶらさげた縦糸のたこ糸16本に横糸の毛糸が多いときで50本ほど入り、糸を複雑に動かします。横糸は2本が一組のものと3本が一組のものがああり、地の部分を2本一組で織り、3本一組の横糸で文様の縁取りをつくります。

当館でのチルカット織りの講習会は2度目になります。前回ははじめのほうでつまずいて、先にすすめなかった参加者が多かったため、講師がデザインと指導法をかえたところ、かなり順調になりました。それでも6時間かけて時間内での完成まであと一歩というところでした。

（学芸グループ 笹倉 いる美）



製作途中の様子

講座

北海道土産と木彫り熊

2020.10.3 13:30-14:30

講師：宮本 花恵（当館学芸員）

講座「北海道土産と木彫り熊」は、新型コロナウイルス感染拡大防止による臨時休館にともない中止となったロビー展解説会の代わりに、講座として開催しました。

本講座では、北海道土産の中でも特に木彫り熊の歴史や変遷を紹介し、ロビー展で展示した木彫り熊の特徴を、写真を見ながら解説しました。またロビー展でも上映した荒木繁氏が木彫り熊を製作する映像「ひと手間かける」（公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構「平成28年度アイヌ文化伝承活動アーカイブス「技」vol.1」2017年）とロビー展の会場風景を紹介した動画を上映しました。

北方民族博物館では、1950年代に製作された木彫り熊を多く所蔵しています。木彫り熊の足裏や台座に、地名や製作者の名前が彫られているものがあります。また当館に寄贈された時の聞き取りによって、旭川や登別、阿寒、弟子屈、網走、北見、白老、釧路など道内各地の観光地で購入されたものと分かりました。

旅行の記念品に購入された事例のほか、贈答用に用いられた木彫り熊もありました。例えば、北見で収集された「ぶどう親子熊」（1959年）の足裏には「小学校入学祝い」とあります。入学記念に贈られたもので、裏には子どもの名前も彫られています。

最後にロビー展の開催後に寄贈された木彫り熊を紹介しました。台座の裏には「網走刑務所製」の焼き印が押されています。網走刑務所では、平成7年（1995年）ごろまで木彫り熊を製作していたとのことでした。

講座終了後には参加者から、木彫り熊の思い出をうかがうことができました。まだまだ奥深い木彫り熊の世界がありそうです。（学芸グループ 宮本 花恵）



網走刑務所製の木彫り熊

ウェルカムケース

サハとウシ

2020.11.4 ~

会場：当館ロビー

11月から新しくなったウェルカムケース展示について紹介します。展示のテーマは「サハとウシ」です。

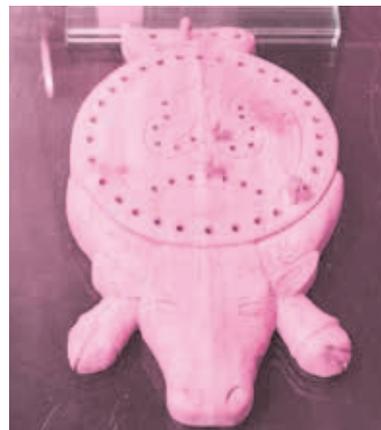
おもにロシア連邦サハ共和国に暮らすサハの人びとにとって、ウシはウマと並んで重要な動物です。ウシは、サハの祖先が南の草原地域に暮らしていた頃から飼育されてきた伝統的な家畜です。ウシの乳や肉は食料、特に乳はバターやクリーム、厳しい冬を越すための貯蔵食品の材料などに利用されてきました。また、荷物の運搬にはウシに引かせたそり橇や荷車が使われていました。

ウシはサハの冬の象徴でもあります。冬は、青いまだら模様のある白い雄牛で、大きな角を持ち、その冷たい息は霜を降らせると考えられてきました。この「冬の雄牛」は12月初めに北の海からやってきて、サハの大地に厳しい寒さをもたらします。その後、寒さが緩むにつれ、1月末に一方の角が、2月末にもう一方の角が折れ、3月末ころに春の到来とともに頭が落ちると北の海に戻っていくのです。サハでは、冬の雄牛を擬人化した「チスハーン」と呼ばれるキャラクターも創り出されています。

展示した資料は、木製カレンダー、ウシの形をしたヤナギ製とカモ骨製の玩具です。このうちカレンダーは、全体としてウシを象っていて、その頭の上に輪状に巡っている穴が「日」、輪の内部の扇形に並んだ穴が「曜日」、輪の中央部にW形に並んだ穴が「月」、尾の部分の穴が「四季」を表し、それぞれの穴に小さな棒を刺して使います。

ウシとカレンダー、あまり関係がなさそうな取り合わせですが、極寒のシベリアにあり、長い冬を抱えるサハ共和国では、カレンダーに冬の象徴のウシが使われるのはごく自然なことなのかも知れません。

（学芸グループ 中田 篤）



カレンダー（サハ、20世紀前半製作、ロシア/サハ共和国/ヤクーツク）

はくぶつかんクラブ

トンコリを演奏してみよう

2020.10.31 10:00-12:00

講師：TOWA氏（音楽家）

音楽家のTOWA氏をお招きし、子ども達を対象にトンコリの演奏体験を行いました。

ほとんどの子ども達はトンコリに触れるのが初めてだったようでした。最初に講師からトンコリの由来や部位の名称、弾き方、トンコリに纏わるアイヌの物語などが紹介されました。

そのあとに実際に一人一人にトンコリを手にとってもらい、曲の練習が行われました。今回は講師が、このはくぶつかんクラブのために作曲してくれた4曲をみんなで練習しました。それぞれ春、夏、秋、冬をイメージして作った曲だということです。講師が演奏するシンセサイザーに合わせてみんなでトンコリを練習した後、最終的に合奏を行いました。

練習中は、講師が参加者一人一人の演奏について指導を行い、あっという間に上達していく様子に担当者としても驚きました。はじめて触れるトンコリでしたが、みんな楽しく演奏できたようです。

合奏が終わった後に、TOWA氏のスペシャルコンサートが行われました。トンコリと電子楽器、歌声を組み合わせで作られるTOWA氏独特の音世界に、子ども達もうっとりとして聴き惚れている様子でした。

今回は子ども向けとしての開催でしたが、大人向けの講習会を求める声が多くありました。トンコリの魅力や人気の高さを改めて体感することができました。



参加者に演奏を指導するTOWA氏

(学芸グループ 野口 泰弥)

はくぶつかんクラブ

北方民族の太鼓をつくろう

2020.11.7 10:00-12:00

講師：宮本 花恵（当館学芸員）

北方民族の太鼓はトナカイなど動物の皮をワクにはって作ります。今回は、小学校1年生から6年生までの参加者11名と、身近にある材料を工夫して北米の北西海岸先住民の太鼓づくりに挑戦しました。

はじめに参加者と北西海岸先住民が暮らしている地域を地図で確認しました。北西海岸先住民は、アラスカからカナダにかけて太平洋にそった地域に暮らしている人びとです。北海道よりも高緯度の地域に暮らしていることを知った子ども達は、北西海岸先住民の暮らしに関心をもった様子でした。

次に、太鼓の使用例と紋章について説明しました。北西海岸先住民の太鼓は祭礼のダンスに用いられ、紋章は自分たちの祖先と関りのあった動物などがモチーフとなります。太鼓の絵柄には紋章を参考にしたワタリガラス、カエル、オオカミの3種類から好きな絵を選んでもらいました。絵はカーボンシートを使って布に写します。



太鼓作りの一番むずかしい点は、布とワクをヒモでしっかり固定することです。ヒモをひっぱり、布がはるようになるには力が必要です。

太鼓づくりに挑戦

低学年の参加者には、講師や付き添いの保護者が補助をしながらすすめました。

仕上げにポスターカラーで着色します。色は黒を基本に、赤、青、緑から一色を選んでもらいました。色見本を参考にしながらも、自分のオリジナルにこだわる子ども達もあり、できあがった太鼓にはそれぞれの個性がでていました。

最後にバチをつくりました。全員が時間内に作り終わる



と、自然と拍手がおこりました。子ども達は、それぞれ完成した太鼓とバチをもって、達成感に満ちあふれた表情をしています。

完成した太鼓をもってポーズ

した。
(学芸グループ 宮本 花恵)

講座

日本とアラスカ先住民の歴史

2020.11.28 13:30-15:00

講師：野口 泰弥（当館学芸員）

今回の講座では江戸時代～第二次世界大戦中までの日本人とアラスカ先住民の接触の歴史について紹介しました。

「アラスカ」というとどこか遠い場所というイメージを持たれる方が多いと思います。確かにアラスカは日本からは遙か遠く離れていますが、日本人は長年、この地域、そしてアラスカの先住民と数多く接触してきました。

アラスカの先住民は4つのグループに大別できます。①アリューシャン列島を中心に暮らすアリュート、②南西部以北の沿岸域に暮らすエスキモー、③内陸部を中心に暮らす北方アサバスカン、④南東部沿岸の北西海岸先住民です。

アラスカは1741年にロシアの探検家ヴィトウス・ベeringer一行がヨーロッパ人としては初めて発見し、その後はロシアによる植民地化が進みます。しかし、ロシアは1867年にアラスカをアメリカに売却し、それ以降、アラスカはアメリカ領として発展していきます。明治時代は1868年に始まるため、概ねロシア領時代は日本の江戸時代に相当し、明治時代の幕開けとほぼ同時にアメリカ領になっていると言えます。19世紀末～20世紀初頭にはアラスカ各地でゴールドラッシュが起り、日本人を含む多くの人々がこの地に駆け付けました。

アラスカ先住民と日本人の直接的な接触は江戸時代に始まります。有名な大黒屋光太夫、津太夫らは航海の途中に漂流し、アリューシャン列島に漂着し、帰国後にアリュートの情報を日本にもたらしました。彼らの他にも例えば長七ら伊勢丸一行は文久元年（1861年）にアリューシャン列島のアッツ島に漂流しています。

アラスカ本土に直接漂着した漂流民の事例は知られていませんが、小栗重吉ら督乗丸一行、次郎吉ら長者丸一行は、漂流の末、外国船に救助され、その後アラスカのシトカに上陸し、現地の先住民であるトリンギットを目撃しています。

明治～大正時代には偶発的な漂流とは異なり、自らの意思でアラスカに渡航する者が現れます。その代表者としてポイントバローのエスキモー社会に入り込み、彼らを連れ、アラスカ内陸部にビーバー村という新たな集落を作ったフランク安田（安田恭輔）や、同じくエスキモーたちと交流しながら人命救助や数々の犬嚮用の新ルートを開き、またフェアバンクスのゴールドラッシュを引き起こしたことで知られる和田重次郎がいます。また彼らほど知られていませんが、彼らに先立ちアラスカ入りしていた阿部敬介も紹介しました。彼はポイントバローに3年ほど滞在し、日本に初めて学術的なレベルでのアラスカ先住民の情

報をもたらした人物です。

このように明治～大正時代にはアラスカで活躍し、先住民社会に深く入り込んだ日本人もいましたが、第二次世界大戦が始まると、収容所に入れられた人物もいました。

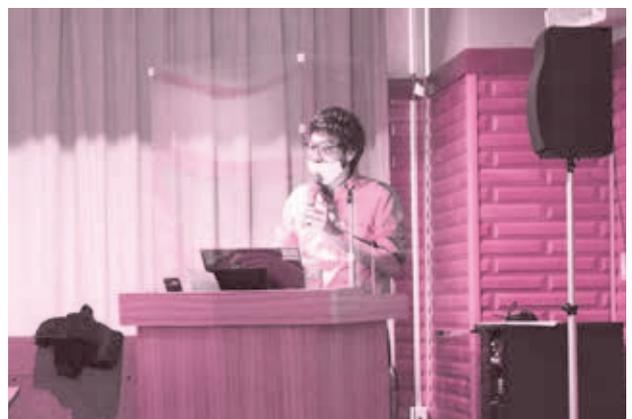
昭和17年(1942年)6月に日本軍がアッツ島を占領します。当時アッツ島には42名のアリュートが暮らしていました。9月、日本軍はアッツ島民を小樽に連行し、終戦まで抑留します。戦時中の劣悪な食料事情などにより、抑留中に多くのアリュートが命を落としています。また戦後もアメリカ政府の方針により彼らはアッツ島に戻ることは出来ませんでした。結果的に日本の活動はアッツ島アリュートの言語や文化に壊滅的な影響を与えてしまったと言えるでしょう。

戦前の日本によるアラスカ研究は多くはありませんが、アリュートやアリューシャン列島だけは戦前にも日本人によって何度も調査が行われています。本講座ではその中でも昭和9年(1934年)に、海軍の指示により農林省所属船「白鳳丸」によって行われたアリューシャン列島の極秘調査について当時の資料から紹介しました。

戦後になり、日本人によるアラスカ研究は本格化していきます。その嚆矢となったのは昭和35年(1960年)に行われた明治大学によるアラスカ地域学術調査団の実地調査です。昭和37年（1962年）の第二次調査に参加した岡田宏明（当館2代目館長）は、ネルソン島でのエスキモー調査で、住民の明らかな警戒心や猜疑心を経験しています。住民らのネガティブな反応は戦時中の日本の活動による直接的な影響でした。

こうした戦前・戦中期までの日本の活動は、現在にも様々な形でアラスカ社会に影響を及ぼしています。フランク安田や和田重次郎の名前は現代まで語り継がれている他、日本軍のアラスカ進出に備えるために作られた「アラスカハイウェイ」は現代も、この地域の主要な道路の一つです。

本講座を通じて、今後のアラスカ先住民との関わりを考えて貰えれば幸いです。（学芸グループ 野口 泰弥）



講座の様子

上映会

北方民族博物館 シアター 冬

2020.12.13 10:00-11:30

講師：野口 泰弥（当館学芸員）

今回の上映会ではシリーズ「極東」（北海道新聞社、風交舎、2016年）から「大シベリアに行く 光太夫とマンモスを追って」と「アムール川・間宮海峡に行く 林蔵の道」の2作品を上映しました。

はじめに上映した「大シベリアに行く 光太夫とマンモスを追って」は、天明2年（1782年）冬に暴風雨にあい漂流した大黒屋光太夫の足跡と永久凍土から出土したマンモスの化石について紹介しています。

大黒屋光太夫は、漂流から約9年半後の寛政4年（1792年）にロシアから帰国しました。光太夫からの聞き取りをまとめた『北槎聞略』は、当時を知ることでできる貴重な資料です。映像では『北槎聞略』をもとに、光太夫の訪れたロシア極東の町を訪ねていました。

さらに同映像では、マンモスの化石発掘と地球温暖化との関係を指摘していました。また少しですが、平成19年（2007年）に復元されて、当館に展示されたマンモスについても触れられています。

次に上映した「アムール川・間宮海峡に行く 林蔵の道」は、サハリンからアムール川流域にかけて取材し、間宮林蔵の足跡をたどった映像です。

函館で伊能忠敬から測量を学んだ間宮林蔵は、文化5年（1808年）、春にサハリンへ渡り調査すると、さらに翌年の夏には、ニブフの交易隊に参加してサハリンから大陸へ渡り、朝貢交易が行われた町デレンを目指しました。

映像ではクイサリという、先祖がアイヌ民族の末裔という人びとにインタビューをしていました。クイサリの人びとが家宝にしている清朝の役人の衣服は、祖先がクロテンと交換したものだそうです。この衣服は、日本では蝦夷錦とも呼ばれています。

どちらも現地取材をもとにしたドキュメンタリーでロシア極東地域の豊かな自然と日本とロシアの歴史を知ることができました。（学芸グループ 宮本 花恵）



上映会の様子

訃報

津曲敏郎先生のご逝去について

津曲敏郎先生が令和2年（2020年）11月7日にご逝去されたことを謹んでお知らせいたします。



津曲敏郎先生
（当館常設展示室で2019年撮影）

津曲先生は平成29年（2017年）4月に当館の第5代目館長に就任されました。ご就任以来、館内外で館長講座を開催されたり、北海道大学総合博物館元館長の経験を活かして、同館での当館移動展『融ける大地：温暖化するシベリア・中央ヤクーチア』を実現されたりなど、当館活動の充実拡大の指揮をとられていました。

津曲先生と当館との関わりは長く、開館当初から資料収集評価委員を務められました。シンポジウムの報告者として、また、執筆・助言など種々に協力くださっていました。現在常設展示室で北方諸言語の言葉（数詞）を紹介していることも津曲先生のアドバイスによるものです。

病床からも今夏の特展図録へ寄稿をされ、最後まで当館のことを気にかけておられました。この論考「シャマンの語源をめぐって」は、現在世界中で使われているシャマン（シャーマン）という言葉が、先生がご専門のツングース諸語のエベンキ語から広がっていったことを論じたものです。

ご趣味はクラシックギターで、もしかしたら当館のイベントでみなさまにもその音色を披露されたかったのかもかもしれませんが、その機会はもてませんでした。

新型コロナウイルス感染拡大時に当館が休館した際、常設展示室を津曲先生が解説する動画をYouTube（北海道リモートミュージアム）にあげています。よろしければこちらをご覧ください。津曲先生を偲んでいただければと思います。（学芸グループ 笹倉 いるみ）

津曲敏郎先生略歴

昭和26年（1951年）9月30日 福岡県生まれ

専門 民族言語学（特にツングース諸語の記述的・類型的研究）

北海道大学名誉教授、北海道大学総合博物館元館長

主著に『満洲語入門20講』（大修館書店）、『ビキン川のほとり：沿海州ウデへ人の少年時代』（北海道大学出版会）ほか

北海道立釧路芸術館

紡ぐ心と暮らし ビーズのはなやぎ・刺繍ししゅうの美 ～北海道立北方民族博物館コレクション

2020.10.31-2021.1.20

会場：北海道立釧路芸術館

北海道では平成30年（2018年）から「アートギャラリー北海道」を展開しています。これは道内の美術館等が連携することで、「美術館を行き交う人々があふれ、北海道全体がアートの舞台となる」ことを目指す取り組みです。対象となる施設は、道内で美術作品（絵画、写真、彫刻、工芸品、文化財等）を収集展示している公私立美術館、文化施設、企業等で、幅広いジャンルの施設がネットワークでつながることを目的としています。

現在83館が参加しており、北方民族博物館も連携館になっています。北海道立釧路芸術館が主催で開催中の展覧会「紡ぐ心と暮らし ビーズのはなやぎ・刺繍ししゅうの美～北海道立北方民族博物館コレクション」もこのアートギャラリー北海道の企画展のひとつになります。

本展は、北方諸民族の生活用具にちりばめられたビーズと刺繍ししゅうをテーマに、表現の多彩さと、ここにみられる精神性を紹介し、北方諸民族の美意識を感じていただくことを趣旨としています。

身の回りの自然素材を用いて暮らしていた北方諸民族のもとに、色鮮やかなガラス製のビーズと色糸が交易によって届くようになると、これらの素材が巧みに取り入れられました。衣服や帽子、装飾品などが華やかになります。また、素材だけではなく、デザインや技法も伝わります。こうしたなかで、民族ごと、地域ごとに好まれたものがあり、ビーズや刺繍は各民族を特徴づける役割を果たすようになっていきます。展示は北海道アイヌ、サハリンアイヌ、北西海岸先住民、北方アサバスカン、アルゴンキン、イヌイト／エスキモー、ウイльта、ニブフ、コリヤーク、ツングース諸民族（ナーナイ、ウリチ、エベンキ）、ドルガン、サハ、カザフ、サミのコーナーというように民族ごとで構成されたので、この特徴がより際立っています。

当館では、北方で暮らすための知恵や技術、道具の使い方や、機能を説明するということをしていますが、今回は生活用具を造形表現と位置づけ、その魅力にあふれるものが展示資料として選択されました。釧路芸術館の学芸員が作ったストーリーにあわせ、候補となる資料を当館から提案し、釧路側で最適となるものを選択するという作業を繰り返しました。機能美という言葉があるように、すぐれた道具には美しさを感じられることがあり、今回の展示には、道具としても造形表現としてもみどころのある210点が並びました。釧路芸術館の広いスペースを贅沢に用いたディスプレイは、展覧会タイトルどおりはなやぎにあふれたものになっています。



ドルガン(左)とサハの衣服

関連事業として、ギャラリーツアーや教員のための鑑賞研修を開催したほか、こどもから大人まで楽しめるワークシートも用意されています。

北海道立釧路芸術館と当館は、2年前の「極北の暮らしと手仕事 イヌイトの壁かけ展」でも協同して展覧会を開催しました。当館学芸員が行ったオープニングトークには、40名近くの参加者があり、当館も釧路市でおなじみになってきたようです。また展示を楽しんでご覧になっている様子に、こうした困難な時のミュージアムの役割について考えさせられました。

今後も当館では、さまざまな団体や個人と連携して、所蔵資料を活用することを考えていきたいと思います。

(学芸グループ 笹倉 いる美)



ナーナイの衣服

令和2年度(2020年度)企画展「アマゾン博士」の北方紀行：山口吉彦氏旧蔵・北方民族コレクションより

山口吉彦氏旧蔵・北方民族コレクションは、アマゾン民族館元館長・山口吉彦氏が1995～2002年にかけて自ら世界の北方各地を訪れ、収集した民族資料約700点から構成されています。本企画展では、北方各地を回る「アマゾン博士」山口氏の資料収集旅行をたどりながら、北方民族コレクションを紹介します。

- 期間：令和3年（2021年）2月6日（土）～4月4日（日）
- 会場：北海道立北方民族博物館・特別展示室
- 主催：北海道立北方民族博物館
- 後援：一般社団法人アマゾン資料館、鶴岡市
東京農業大学生物産学学部
- 主な展示資料：ナーナイ、モンゴル、サミなどの民族資料
(計120点程度)

□関連事業

- 令和3年（2021年）2月6日（土）10:00-11:30
講演会「アマゾン民族館と北方民族資料」
講師：山口 吉彦氏（アマゾン民族館・元館長）
- 令和3年（2021年）2月28日（日）13:30-15:00
講座「企画展解説講座」 講師：中田 篤（当館主任学芸員）

□山口吉彦氏の北方民族コレクションの目録刊行

北海道立北方民族博物館資料目録16号
令和3年（2021年）1月20日（水）発行

11月 開催予定の行事中止

■講座・講習会の中止

- 講習会 物語を紡ぐラトビアの伝統模様：刺繍とお守り作り体験
11月13日（金）
- 講座 ラトビアの伝統文化と現在の暮らしに触れる 11月14日（土）



INFORMATION

行事報告

◆10月10日（土）はくぶつかんクラブ「動物刺繍のマイバッグ」（講師：石原生久代/当館解説員）を開催しました。刺繍に挑戦してオリジナルのマイバッグを作りました。



オリジナルのマイバッグづくりに挑戦中

◆12月5日（土）はくぶつかんクラブ「皮でつくるトラベルタグ」（講師：菅原章子/当館解説員）を開催しました。サミの紐を織ってカバンにつけられる名札入れを作りました。



サミの紐づくり

職業体験報告

◆10月13日（木）-10月16日（金）の日程で日本体育大学附属高等支援学校2年生2名、11月4日（木）-11月6日（金）の日程で同校1年生2名の職業体験を受け入れました。それぞれ資料カードやパンフレット、図書の整理、花壇の整備など博物館の仕事を体験しました。



パンフレットの仕上げ作業



図書の整理作業

お知らせ

◆例年12月下旬に開催されている「ロビーコンサート～青少年のための室内楽の夕べ」は中止となりました。
◆年末年始の休館は12月28日（月）-1月4日（月）です。



常設展示室の大掃除

北方民族博物館だより
No.119

令和2年（2020年）12月25日発行
編集・発行 北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市宇潮見309-1
Tel 0152-45-3888 Fax 0152-45-3889
e-mail: tonakai@hoppohm.org
http://hoppohm.org

指定管理者

一般財団法人北方文化振興協会